

かいふうまる
快風丸

■快風丸とは

徳川光圀の命により蝦夷地探検の目的で、元禄元（1688）年に石狩を訪れた船です。南部、津軽藩の助力を受けて10年間もかかって建造され、長さ27間（約53m※注）、幅9間（約18m）、帆柱の高さ18間（約35）、木綿5百反の帆に40挺の櫓を備えた巨船でした。また、海図や羅針盤など近代的な装備ももっていました。

■船出

元禄元年2月（旧暦）、崎山市内を船長に65人の水夫が乗り込み、3年分の食糧を積み、那珂湊（現茨城県ひたちなか市）を出発しました。

■松前から石狩へ

松前で松前藩に蝦夷地探検の許可を求めましたが許されず、交渉の末商船の扱いとして石狩までの航行を許されました。

■石狩到着

6月21日（旧暦、26～27日の説もある）に石狩河口に到着し40日間ほど停泊して周辺を調査しました。

■調査記録

（水戸藩豊田亮が書いた「北島志」や、「快風丸蝦夷聞書」などに記載されている）

- ・集まってきた940人ほどのアイヌに酒を振舞った
- ・たくさんの鮭が川をのぼり船の櫓にあたるほどであった
- ・生鮭100本を米1斗2升と交換した
- ・アイヌは川端に住み、兩岸は木が茂って往来できず船で行き来している
- ・アイヌの村には一人ずつ大将がいて、石狩川流域の惣大将はカルヘカという人物
- ・干鮭を細かく切り湯煮して鮫の油をかけて指で食べ、生鮭は氷頭の部分を食べる
- ・熊笹でふいた家は水生植物を編んで囲っている。口を1か所開けて出入りし、夜は親子兄弟一所に寝ている
- ・家の中の地面にいろりを掘り、木をくべてあたっている
- ・船が難破漂着してこの地に留まり、アイヌ人を妻として居住する和人が十数人いる
- ・シャクシャインとの戦いのあと、松前藩はアイヌから刃物や武器を残らず取り上げた

等々を記録しています。

■帰還

快風丸は、熊皮、干鮭、塩引き鮭1万本、ラッコ皮、トド皮などを積み、12月に那珂湊に帰港しましたが、その後二度と蝦夷地を訪れることはありませんでした。

（石井滋朗）

※注 当時の1間は6.5尺

(1) 石狩町（1972）石狩町誌/上巻、石狩町。
 (2) 鈴木トミエ（1996）石狩百話、石狩市。
 (3) 石狩市教育委員会文化財・博物館開設準備室（2001）ふるさといしかり、石狩市教育委員会。
 (4) 野沢信義（1998）北方史史料集成第四巻、（有）北海道出版企画センター。